

平成21年度水環境文化賞児童・生徒の部(みじん子賞)を受賞して 地域の生物多様性を「知る」→「伝え、守る」活動 地元の水辺の現状調査の成果を、市民啓発に活かし、保全につなげていく高校生たちの活動

福岡県立北九州高等学校魚部

魚部誕生の経緯

魚部(ぎょぶ)は北九州高校にある「部活動」の一つである。1998年4月、部員が一人もいなかった理科部に有志10名が仮入部して、6月の文化祭を盛り上げようということから、活動が始まった。

地元の紫川に自分たちが入ってどんな魚がいるのかを調べ、文化祭で魚たちを見てもらう企画を実施したところ、予想外に大好評。

これに気をよくした「有志」がそのまま残って活動を続け、初代魚部員となった。自分たちは川で魚ばかり採っている…“そんな俺たちは、魚部(ぎょぶ)だ!”という彼らの声から、日本で唯一の部活動「魚部」は誕生した。

1. 活動の理念

活動の柱は「知ること、伝えること、守ること」の3つである。まず、魚部の高校生たちは実際に様々な水辺に入り、地域の自然環境に体験的に関わる中で、多くの発見や学びを重ねていく。そして、そこで得た成果を眠らせずに、市民啓発や環境保全に生かすために、さまざまな取組を展開していく。「知る」ことが「伝える」ことや「守る」ことにつながっていく、それが魚部の活動だ。

2. 知ること

「自分たちが地域の水辺の現状を知る」ことから始まる。身近な水辺、つまり河川や溜池、干潟の中に実際に入り、何がいて何がいないのか、ひたすら調べていくの

が“魚部流”。

調査場所は、積み重ねてきた体験をもとに「想像」と「勘」で選んだ場所。この川はどうなのか、あそこの池はどうなのかと調査場所にあれこれ悩むのも、ギョブる(※野外調査をするという意味の魚部用語)時のワクワク・ドキドキ感の大事な構成要素なのだ。

魚部誕生から12年間、年間約50回の調査を続け、地域の「川・池・干潟」の生物や生息環境の多様性や現状について多くのことを知った。

3. 伝えること

①地元の生物多様性を知る～北九州市立水環境館(写真1, 2)

水環境館は、北九州市の都心部を流れる紫川の下流域に、2000年7月に開館した地域の水環境を学ぶ施設だ。

魚部は、開館半年後の2001年3月から現在まで、館内での水生生物の展示活動に取り組んでいる。部員たちは、展示の企画からポスター作成、パネルやキャプションなど展示物の制作、展示生体の確保、搬入搬出を行う。野外調査で得た成果を活用し、展示を通じて市民啓発をする場としている。

②言葉や体験で伝える

●小中学校でのゲストティーチャー(写真3, 4)

地域の小中学校に招かれ、魚部の活動や水生生物の話をしたり、一緒に地域の水辺調査を行ったりする活動で、年間に数回、不定期に実施している。

●自然観察会(写真5)

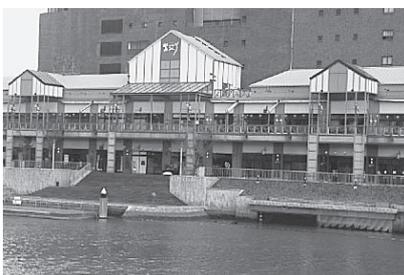


写真1 北九州市立水環境館



写真2 企画展示(2009年・干潟展)



写真3 岡垣町立戸切小学校



写真4 那珂川町立中学校(3校合同)



写真5 干潟体験会(2009年9月)

自然観察会や体験学習、活動発表会、水辺イベントで魚部員が講師となって、参加者に川や水生生物の説明などをする活動も実施している。

4. 守ること

①学校ビオトープを活用した「地元」の絶滅危惧種保護の取組（写真6～11）

2000年春に作った学校ビオトープを様々な形で活用する。北九州市に依頼され小倉南区産の水草「デンジソウ」の保護もその一つである。開発のため生育場所を失った絶滅危惧種の避難場所として学校ビオトープを利用している。

②希少種生息地の保全に向けた働きかけ

地域の自然に関わる中で、魚部も希少種が生息（生育）する貴重な自然にいくつも出会えた。ここが失われたら、福岡県からその種が絶滅してしまう、そんな場所もある。魚部しか知らないその事実を、具体的かつ実効的に「守ること」につなげるべきではないかと考えた。それぞれの希少種（やその生息地）ごとに、関係する行政、それに専門家である関係学会や博物館や大学の研究者等に情報提供や意見交換を行っている。何らかの「環境への配慮」ができないかを、立場を超えて話し合い、少しでも良い方向に導けるように取り組んでいる。

●「貴重種の宝庫の溜め池」と「高速道路工事」

極めて局所的分布するキボシチビコツブゲンゴロウが安定して生息する、国内でわずかに数ヶ所のうちのひとつが、東九州道の建設工事によって、知られないまま消失することを知り、日本鞘翅学会に連絡して要望書を提出してもらった。水草も、約15種もの絶滅危惧種が生育する、県内屈指の自然豊かな溜池である。NEXCO西日本は、専門家による検討委員会や環境調査会社による再調査など実施した。自然財産との共生を目標に取り組んでいると信じている。

③調査成果の文章化～「そうだ、図鑑を作ろう！」

（写真12）

調査研究で得た成果を文章にして、分布や生息情報を確かな記録に残すことが「守ること」の第一歩になると実感した。また、図鑑『北九州の淡水魚 エビ・カニ』（2004年春刊）に加わり、活動の積み重ねが一冊の本になるんだ、できるんだと知った。さらにその後、10周年記念誌『魚BOOK』（2007年刊）をまとめ、『北九州市の野生生物』（北九州市・2008年春刊）にも執筆や画像提供で参加し、「活動成果を本にして残す」という気持ちがますます高まった。

そして、2009年度。7月には『福岡の水生昆虫図鑑』、11月には『北九州の干潟BOOK』という2冊の本を刊行した。

執筆だけでなく画像提供や同定等でも、活動を通じてお世話になった方々やそのつながりの方々など、地元や全国各地の専門家のご参加やご協力をいただくことができた。そのためこの2冊の本は、ただ単に高校生が何か本を出したということだけにとどまらず、地域の生物多様性を知る基礎資料としての価値を持つことができたと考えている。

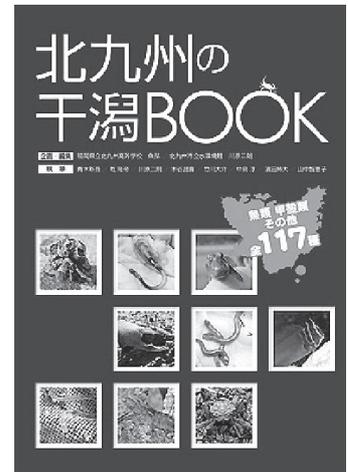


写真12 福岡県の水生昆虫図鑑（左）と北九州の干潟BOOK



写真6 ビオトープ案内板



写真7 デンジソウの保護エリア作り

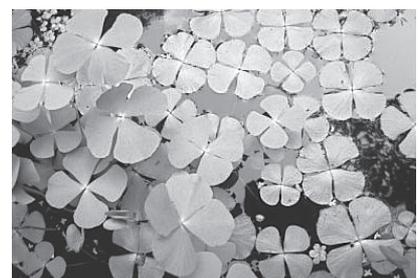


写真8 保護するデンジソウ



写真9 説明パネル



写真10 若園保育所の遠足



写真11 小倉南幼稚園の訪問